

ずいそう

ギネスブックへの夢

山 勝 三



生来不器用な上、運動神経が人一倍鈍く、小学校での図工と体育の通知簿はいつも5段階評価の3(普通)だった。もっともこれは実質2以下だったのだろうが、他の教科が比較的よかったので、先生が全体のバランスを考えお情けでつけてくれたのだろう。

そんな訳で自転車に乗れるようになったのも、わんぱく仲間内で一番遅かった。自転車といっても戦後間もない当時は今のような子供用は珍しく、みな大きくて重い大人用の自転車で練習した。当然ながら、ちびっ子がサドルに跨ると足が地に届かないので、「三角乗り」と称する、車体の三角形のフレームの間に足を差し入れ、平衡を取るために自転車を外側に傾け、お尻を浮かせながら乗った。この動作が運動神経の鈍い私には事他難しく、転倒を繰り返しているうちに嫌になり、そのうち練習をあきらめてしまった。

私が自転車に乗れるようになったのは何と小学5年生の時。ようやくサドルに跨っても、足が地面に着くようになってからである。

何と速くて便利な乗り物だろう。この時以来、自転車は私の愛すべき最良の友となった。嬉しくて朝から晩まで家の近くを乗り回った。学校が休みの日など朝から遠方に出掛け、日が暮れても帰らなかったこともしばしばで、母親に心配のかけ通しだった。

そしてこの頃から、日本を、世界を、自転車で駆けまわる夢を持つようになった。しかし、オトナになって就職し、家庭を持ち、子育て、教育と続くうち自転車とはまったく疎遠になり、とうとう定年まで四十年余の間、夢を果たす機会はなかった。

待望の定年を迎え再就職の誘いを断って、六十歳の誕生日(還暦)を迎えた初冬の日の朝、私は半世紀来の長年の夢を果たすべく自転車に跨り、遙か沖縄を目指して自宅を出発した。長年の夢である自転車による日本一周の旅である。そして、この旅は日本の最南端、沖縄の波照間島でUターン。日本の最北端、北海道の宗谷岬を経て翌年の晩秋、自宅に帰り着くまで一年間、十二ヶ月にわたって続いた。

毎日が刺激の連続で生きる喜びが溢れる充実した

日々だった。それは四十年余の会社員生活では決して得られることのなかった、充実感に満ち満ちた一年だった。

凍るような吹雪の中、寒さに震えながらペダルを踏んだ。焼けるような猛暑の中、滝のように汗を流しながら走った。坂道を必死に登る時、登校途中の高校生が拍手で応援してくれた。耐え難い暑さで、とある農家の軒下で日差しを避けていると、戸が開いてお婆さんが冷たい麦茶をご馳走してくれた。日本列島の各地でそこそこに住まいする人々から受けた親切は数知れない。

この間の走行距離はトータル、二万キロ余。二本の足で稼いだ距離は遙か北極点から南極点に至る長さにあたる。

これに味を占め、古希(七十歳)を迎えた十年後、今度は五人の可愛い孫たちにクリーンな地球を残すため、「自転車の活用による地球温暖化防止」を呼び掛けながら、二度目の自転車による日本一周の旅に出た。

自転車に「地球に優しい自転車を活用しよう!」「自転車に優しい道路環境を実現しよう!」と書いた大きな旗を、旗竿に括りつけて走り、路上で呼びかけるとともに、全国47都道府県のすべての庁舎、主要駅、観光地で直接呼びかけPRした。

また、各地で40を超える新聞社、テレビ・ラジオ局から取材してもらい、新聞、テレビ、ラジオ、インターネットなどのマスメディアを通じ、日本全国の不特定多数の人々にもPRを行った。

あれから八年、今、更に節目の十年を二年後に控え、傘寿(八十歳)を期して、前例が無いと思われる三度目の自転車による日本一周を計画している。

今度は日本列島の各地で、地球の将来を担う小中学生と一緒に走るとともに、高齢化社会にあって「達者で元気」な老人のシンボルとして走り遂げたい。

そして、実現した暁には世界記録として、ギネスブックに登録を申請する予定だ。夢は幾つになっても尽きることはない。

—やま かつぞう コマツ OB—